

2017年度 聖学院大学総合研究所 <児童>における「総合人間学」の試み研究会 主催
 第2回<児童>における「総合人間学」の試み研究会
 齋藤一雄氏による「特別支援学校（知的障害）の教育課程編成と
 音楽鑑賞の指導」報告



発題者：齋藤一雄氏

2017年度第2回「<児童>における総合人間学の試み」研究会は、2018年2月21日に開催され、2018年度から児童学科が特別支援教育の教職課程をスタートさせることを念頭に、齋藤一雄氏による「特別支援学校（知的障害）の教育課程編成と音楽鑑賞の指導」と題した報告がなされた。報告の概要は以下の通りである。

日本の学校の全体像を示すと、児童学科で関係している保育園、幼稚園、小学校、それから中学校、高等学校があるが、それとは別に特別支援学校、以前は聾学校、盲学校、養護学校といわれていたものがある。学校教育の目的が学校教育法で示されているが、特別支援学校の目的には「準ずる教育」というのが一つある。何に準ずるかという、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教育に準ずるということである。もう一つの目的には、「障害による学習上生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な知識、技能を授ける」ということがあり、ここが特に特別支援学校の大きな役割となってくると思われる。

知的障害の子どもの特性について考えると、知

的障害の子どもは、発達期に知的機能の遅れがあるが、知的機能の遅れだけではなく、社会生活への適応の困難さを併せ持っているということである。最近の学生にフーテンの寅さんの話をしても知っている学生がもういないけれど、寅さんのフーテンというのは、軽度知的障害という意味である。寅さんは人に迷惑をかけながらもなんとか社会生活をしているので、知的障害ではないということである。一般的には知能指数で、70から75以下、例えば80くらいの子どもたちは境界線とかいわれるが、こういう子どもたちを含めて知的障害の子どもは通常の教育課程で勉強していくには若干の遅れがあるということである。適応の困難のところでは、他人との意思疎通とか、日常生活が通常の子どもたちの段階に至っていないということになる。

特別支援学校では、教科名が同じでも、子どもの実態に合わせて目標、内容は異なってくる。また教科を合わせた指導ができるということで、内容があいまいになりがちだということがある。教科の内容を把握しながら合わせた指導をするという内容と方法の二重性があると昔から言われていて、この点が理解の難しいところだといわれている。もう一つは、教育の内容が示されているが、知的障害の場合それはかなりおおざっぱなので、教師が子どもの実態をみて内容を選択、組織して、それをどうやって教えていくのかを考えなければならないというところがある。具体的には日常生活指導、遊び、生活単元学習、作業学習、このあたりが合わせた指導の代表的なものであり、遊びも学習の一つの方法として位置づいている。作業学習については、将来の職業自立に向けた指導をしていくということが特徴となる。教科の名称となっているものもあるが、例えば国語だからといって国語の内容だけ学習するというのではなくて、日常生活学習と関連したり、作業学習と関連したり、内容的にはいろいろなものがあわさって指導

されるということになる。特別活動、自立活動というものがあるが、知的障害の場合、例えば言葉の発音とか、体の動かし方とか、障害に特有の課題がたくさんあるが、それをとりだして指導すれば改善が望めるかという、それには難しい面がある。例えば聴覚障害の点字の指導とかはわかりやすく設定できるが、知的障害の子どもたちの自立活動の指導には難しい面があるということである。将来の自立に向けたという意味で、社会生活を営む上で身につけておかなければいけない課題が、例えば約束を守るということから始まって、電車を使って通勤できるとか、会社の人とうまくやるとか、たくさんあり、その子どもの今の発達の必要な課題と社会的に要請されるもの、その絡みを教員が捉えて目標を設定していかなければならない点が一番難しいところである。

小学部、中学部、高等部とみていくと、指導の形態が同じ割合ではなく、例えば日常生活指導はだんだん少なくなって、作業学習は中学部、高等部で設定され、特に高等部で大きな割合となっている。小学部、中学部、高等部の役割が一つの学校の中で大きく違ってきているというのも学校経営の難しい点である。

次に知的障害児の音楽鑑賞の指導に関する実践研究について紹介する。知的障害児はどのように感じ、聞いたかを、言葉や文字で表現することは難しく、知的障害児の音楽鑑賞に関する研究は少ない。そこで知的障害児を対象に、CD・DVDを活用して音楽教材を提示し、対象時の反応を分析することを通して、教材の提示や指導法について検討することを目的とした。対象児は知的障害の中学部の2名の女子生徒であった。3回の授業を分析の対象とした。1回の授業では、基本的に短い楽曲2曲を提示した。1局はクラシック音楽から、もう1曲はアニメやCMで使用されている生徒の巨海の楽曲とし、手持ちの絵カードや打楽器で生徒が反応する場面も設定した。

実際の生徒の反応の例をあげると、生徒の1名

はバレエ「4羽の白鳥の踊り」に対し、映像が始まると映像に視線を向けつづけていたが、曲の途中では両足を左右に振ったり、文字カードを使ってことばを指さすといったことがみられた。もう一方の生徒では、「しゃー（寄宿舎を意味する）といった言葉を発したり、手を大きく広げるなどの行動がみられた。「大きな古時計」では曲が終わってから口ずさんだりすることもみられた。また曲の終わりでは、動きを止めるなどの変化が見られ、曲想の変化に応じた反応の変化も認めることができた。直接分析の対象としたものではないが、バーバーの「弦楽のためのアダージョ」はバレエ曲のような動きを誘発しやすい音楽でもなく映像もないにもかかわらず、大変緊張して集中して聴いていた。一方でストーリー性のある「ペーターと狼」は集中して聴いてもらえなかった。こうした反応の違いがなぜ生じるのか分析は難しいが、一般的には、聴いたことがあって印象に残っている楽曲、バレエのように動きのある映像と結びついた楽曲は、興味・関心をもって鑑賞できていたと考えられる。子どもたちの音楽鑑賞を集中して行う能力を信じ、その点を配慮した鑑賞指導を幅広く構想し、展開していくことが必要と考えられる。
(文責：鎌原雅彦 [かんばら・まさひこ] 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授、児童学科長)